

芝刈り

寺田寅彦

青空文庫

私は自分の住み家の庭としてはむしろ何も無い広い芝生しばふを愛する。われわれ階級の生活に許される程度のわずかな面積を泉水や植え込みや石燈籠いしどうろうなどでわざわざ狭くしてしまつて、逍遙しょうようの自由を束縛したり、たださえ不足がちな空の光の供給を制限しようとは思わない。樹木もちろん好きである、美しい草花以上にあらゆる樹木を愛する。それでも数千坪の庭園を所有する事ができるならば、思い切つて広い芝生の一方には必ずさまざまな樹林を造るだろうと思う。そして生氣に乏しいわゆる「庭木」と称する種類のものより、むしろ自然な山野の雑木林を選みたい。しかしそのような過剰の許されない境遇としては、樹木のほう

は割愛しても、芝生だけは作らないではいられなかった。そうして木立ちの代わりに安価な八つ手や丁ちようじ子このようなものを垣根かきねのすそに植え、それを遠い地平線を限る常緑樹林の代用として冬枯れの荒涼を緩和するほかはなかった。しあわせに近所じゅういたいに樹木が多いので、それが背景になって樹木の緑にはそれほど飢える事はない。

許されうる限りの日光を吸収して、芝は気持ちよく生長する。無心な子供に踏みあらされても、きびしい氷点下の寒さにさらされても、この粘り強い生命の根はしっかりと互いにからみ合つて、母なる土の胸にしがみついている。そうして父なる太陽が赤道を北に越えて回帰線への旅を急ぐころになると、その帰りを予想す

る喜びに堪えないように浮き立って新しい緑の芽を吹き始める。

梅雨期が来ると一雨ごとに緑の毛氈もうせんが濃密になるのが、不注意なもの目にもきわ立って見える。静かな雨が音もなく芝生しばふに落ちて吸い込まれているのを見ると、ほんとうに天界の甘露を含んだ一滴一滴を、数限りもない若芽が、その葉脈の一つ一つを歡喜に波打たせながら、息もつかずに飲み干しているような気がする。

雨に曇りに、午前午後芝生の色はさまざま変化を見せる。ある時は強烈な日光を斜めに受けて針のような葉が金色に輝いている。その上をかすめて時々何かしら小さな羽虫が銀色の光を放つて流星のように飛んで行く。

それよりも美しいのは、夏の夜がふけて家内も寝静まったところ、読み疲れた書物をたたんで縁側へ出ると、机の上につるした電燈の光は明け放された雨戸のすきまを越えて芝生一面に注がれている。まっ暗な闇やみの中に広げられた天鷲絨びろうどが不思議な緑色の螢光けいこうを放っているように見える。ある時はそれがまた底の知れぬ深い淵ふちのように思われて来る事もある。これを見ていると疲れ熱した頭の中がすうっと涼しくさわやかに柔らいで来る。私は時々庭へおりて行っているいろいろな方向からこの闇の中に浮き上がった光の織物をすかして見たりする。それからそのまん中に椅子いすを持ち出して空の星を点検したり、深い沈黙の小半時間を過ごす事もある。

芝の若芽が延びそめると同時に、この密生した葉の林の中から

数限りもない小さな生き動くものの世界が産まれる。去年の夏の
終わりから秋へかけて、小さなあわれな母親たちが種属保存の本
能の命ずるがままに、そこらに産みつけてあつた微細な卵の内部
では、われわれの夢にも知らない間に世界でいちばん不思議な奇
蹟せきが行なわれていたのである。その証拠には今試みに芝生しばふに足を
入れると、そこからは小さな土色のぼつたや蛾がのようなものが群
がって飛び出した。こおろぎや蜘蛛くもや蟻ありやその他名も知らない昆
虫ちゅうの繁華な都が、虫の目から見たら天を摩するような緑色の
尖塔せんとうの林の下に発展していた。

この動植物の新世代の活動している舞台は、また人間の新世代
に対しても無尽蔵な驚異と歓喜の材料を提供した。子供らはよく

これらの小さな虫をつかまえて白粉おしろいのあきびんへ入れたりした。なんのためにそんな事をして小さな生物を苦しめるかというような事は少しも考えてはいなかった。それでも虫の食物か何かのつもりで、むしり取った芝の葉をびんの中へ詰め込んで、それでは充分満足しているものと思つてゐるらしかった。そのまま忘れて打つちやつておいたびんの底にひっくり返つて死んでゐるからだを見つけた時はやはりいくらかかわいそうだとは思ふらしい。それで垣根かきねのすみや木の下へ「虫のお墓」を築いて花を供えたりして、そういう場合におとなの味わう機微な感情の胚子はいしに類したものゝを味わつてゐるらしく見える。子供が虫をつかまえたり、いじめたり殺したりするのは、やはりいわゆる種属的記憶と称する

もの一つでもあろうか。このような記憶あるいは本能が人間種族からすっかり消え去らない限り、強者と弱者の関係はあらゆる学説などとは無関係に存続するだろう。

子供らはまたよくかやつり草を芝の中から捜し出した。三角な茎をさいて方形の^{わくがた}枰形を作るというむつかしい幾何学の問題を無意識に解いて、そしてわれわれの空間の微妙な形式美を味わっている事には気がつかないでいた。相撲^{すもうとりぐさ}取草を見つけて相撲を取らせては不可解な偶然の支配に対する怪訝^{けげん}の種を小さな胸に植えつけていた。

芝の中からたんぽぽやおずきやその他のいろいろの雑草もはえて来た。私はなんだかそれを引き抜いてしまるのが惜しいような

気がするのでそのままにしておく、いつのまにか母や下女がむしり取るのであった。

夏が進むにつれて芝はますます延びて行った。芝生しばふの単調を破るためにところどころに植えてある小さなつつじやどうだんやばらなどの根もとに近い所は人に踏まれないためにことに長く延びて、それがなんとなくほうけ立つてうるさく見えだした。母などは病人の頭髪のように気持ちが悪いと言ったりした。植木屋へはがきを出して刈らせようと言っているうちに事に紛れて数日過ぎた。

そのうちに私はふと近くの町の鍛冶屋かじやの店につるしてあった芝刈りばさみ鋏を思い出した。例年とちがってことしは暇である。そして

病気にさわらぬ程度にからだを使つて、過度な読書に疲れた脳に休息を与えたいと思つていたところであつたので、ちようど適当な仕事が見つかつたと思つた。芝の上にすわり込んで静かに両腕を動かすだけならば私の腹部の病気にはなんのさしつかえもなさそうに思われた。もつとも一概に腕や手を使うだけなら腹にはこたえないという簡単な考えが間違いだという事はすでに経験して知つていた。たとえばタイプライターをたたいたり、ピアノをひいたりするような動作でもどうかするとひどく胃にこたえる事がしばしばあつた。ことに文句に絶えず頭を使いながらせき込んで印字機の鍵盤けんばんをあさる時、ひき慣れないむつかしい楽曲をものにしようとして努力する時、そういう時には病的に過敏になつた

私の胃はすぐになんらかの形式で不平を申し出した。しかしこれは手や指を使うというよりもむしろ頭を使うためらしく思われた、芝を刈るといふような、機械的な、虚心でできる動作ならばおそらくそんな事はあるまいと思われた。少なくとも一日に半時間か一時間ずつ少しも急いだり努力したりしないで、気楽にやっつけていればさしつかえはあるまい。こんな事を考えながら私は試みに両腕を動かして鋏はさみを使うまねをしてみた。まだ実際には経験しない芝刈りの作業を強く頭に印象させながら腕を動かしてみたが、腹に力を入れるような感覚は少しも生じて来ないらしかった。念のため今度は印字機に向かったつもりになって両手の指を動かしているといつのまにか横隔膜の下のほうが次第に堅く凝って来るの

を感じた。

このような仮想的の試験があてになるかどうかは自分にも曖昧であつたが、ともかくも一つ実物について試験をしてみても

もしさわりがありそうであつたら、すぐにやめればよいと思つた。

風のない蒸し暑いある日の夕方私はいちばん末の女の子をつれて鋏はさみを買いに出かけた。燈火の乏しい樹木の多い狭い町ばかりの

このへんの宵闇よいやみは暗かつた。めつたに父と二人で出る事のない

子供は何かしら改まつた心持ちにでもなっているのか、不思議に黙つていた。私も黙つていた。ある家の前まで来ると不意に「山や

本まもとさんの……セツ子さんのおうちはここよ」と言つて教えた。

たぶん幼稚園の友だちの家だろうと思われた。「セツ子さんは毎

朝おとうさんが連れて来るのよ。」……「おとうさんはいつになつたらお役所へ出るの。……出るようになってたら幼稚園までいっしょに行きましようね。」こんな事をぽつりぽつり話した。表通りへ出るとさすがに明るかつた。床屋のガラス戸からもれる青白い水のような光や、水菓子屋の店先に並べられた緑や紅や黄の色彩は暗やみから出て来た目にまぶしいほどであつた。しかしその隣の鍛冶屋かじやの店には薄暗い電燈が一つついているきりで恐ろしく陰気に見えた。店にはすぐに数えつくさされるくらいの品物——鋏くわや鎌かま、鋏はさみや庖ほうちよう丁ちようなどが板の間の上に並べてあつた。私の求める鋏はさみはただ二つ、長いのと短いのと鴨居かもいからつるしてあつた。

ちようど夕飯をすまして膳ぜんの前で楊枝ようじと団扇うちわとを使つていた鍛か

治屋じやの主人は、袖無そでなしの襦袢じゆばんのまままで出て来た。そして鴨居かもいから二つ鋏はさみを取りおろして積もった塵ちりを口で吹き落としながら両ひじを動かしてぐあいをためして見せた。

柄の短いわりに刃の長く幅広なのが芝刈り専用なので、もう一つのはおもに木の枝などを切るのだが芝も刈れない事はない。芝生しばふの面積が広ければ前者でなくては追いつかないが、少しばかりならあとのでもいい。素人しろうとの家庭用ならかえってこれがいいかもしれぬなどと説明しながら、そこらに散らばっている新聞紙を切って見せたりした。「こういう物はやっぱり呼吸ですから……」。

「そんな事を言った、また幾枚も切り散らして、その切りくずで刃の塵ちりをふいたりした。

芝を刈る鋏と言えば一通りしかないものと簡単に思い込んでいた私は少し当惑した。このような原始的な器械にそんな分化があらうとは予期していなかった。どちらにしようかと思つてかわるがわる二つの鋏を取り上げてぐあいを見ながら考えていた。なるほど芝を刈るにはどうしても専用のものがぐあいがいいという事は自分にも明白に了解された。しかしそれで枯れ枝などを切ると刃が欠けるといふ主人の言葉はほんとうらしかつた。

私はなんだか試験をされているような気がした。主人は団扇うちわと楊枝ようじとを使いながら往来をながめていた。子供は退屈そうに時々私の顔を見上げていた。

とうとう柄の長いほうが自分の今の運動の目的には適している

というある力学的な理由を見つけた、と思つたのでそのほうを取る事にした。

鋏を柄に固定する目くぎをまださしてないから少し待ってくれ
というので、それができるまでそこらを散歩する事にした。しばらく歩いて帰つて来て見ると目くぎはもうさされていて、支点の軸に油をさしているところであつた。店先へ中年の夫婦らしい男女の客が来て、出刃庖丁でばぼうちようをあれかこれかと物色していた。……私がどういふわけで芝刈り鋏ばさみを買っているかがこの夫婦にわからないと同様に、この夫婦がどういふ径路からどういふ目的で出刃庖丁うちようを買っているのか私には少しもわからなかつた。その庖丁の未来の運命も無論だれにもわからうはずはなかつた。それで

も髪を櫛くし巻まきに結った顔色の妙に黄色いその女と、目つきの険しい男とをこの出刃庖丁と並べて見た時はなんだか不安なような感じがした。これに反して私の鋏がなんだか平和な穏やかなものように思われた。

長い鋏をぶら下げて再び暗い屋敷町へはいった。今まで黙っていた子供は急に饒じょう舌ぜつになった。いつ芝を刈り始めるのか、刈る時には手伝わしてくれとか、今夜はもう刈らないかとか、そんな事をのべつにしゃべっていた。父が自分で芝を刈るといふ事がよほど珍しいおもしろい事でもあるように。

しかし私自身にとつても、それはやはり珍しく新しい事には相違なかった。

宅^{うち}へ帰ると家内じゅうのものがいずれも多少の好奇心と、ぼくぜ漠然としたあすの期待をいだきながらかわるがわるこの新しい道具を点検した。

翌日は晴天で朝から強い日が照りつけた。あまり暑くならないうちにと、思つて鋏を持つて庭へ出た。

どこから刈り始めるかという問題がすぐに起こつて来た。それはなんでもない事であつたがまた非常にむつかしい問題でもあつた。いろいろの違つた立場から見た答解はいろいろに違つていた。できるだけ短時間に、できるだけ少しの力学的仕事を費やして、与えられた面積を刈り終わるといふ数学的問題もあつた。刈りかけた途中で客間から見た時なるべく見にくくないようにとい

う審美的の要求もあつた。いちばん延び過ぎた所から始めるといふ植物の発育を本位に置いた考案もあつた。こんな事にまで現代ふうの見方を持つて来るとすれば、ともかくも科学的に能率をよくするために前にあげた第一の要求を満たす方法を選んだほうがよさそうに思われた。能率を論ずる場合には人間を器械と同様に見るのであるが、今の場合にはそれでは少し困るのであつた。もともとの自分の健康という事が主になつてゐる以上、私はこの際最も利己的な動機に従つて行くほかはないと思つたので、結局日陰の涼しい所から刈り始めるといふきわめて平凡なやり方に歸つてしまつた。

するとまたすぐに第二の問題に逢ほうちやく着やくした。芝生しばふとそれより

二寸ぐらい低い地面との境界線の所は芝のはえ方も乱雑になっているし、葉の間に土くれなどが交じっているために刈りにくくめんどうである。その上に刈り取った葉がかぶさったりするとなおさら厄やっかい介であった。それでまずこの境界線のはえぎわを整理した後に平たい面積に掛かるほうが利口らしく思われた。しかしこのはえぎわの整理はきわめてめんどうで不愉快であつて、見たところの効果の少ない割りの悪い仕事であつた。

おしまいにはそんな事を考えている自分がばからしくなつて来たので、いかげんに、無責任に、だらしなく刈り始めた。

青白い刃が垂直に平行して密生した芝の針葉の影に動くたびにザツクザツクと気持ちのいい音と手ごたえがした。葉は根もとを

切られてもやはり隣どうしもたれ合つて密生したままに直立して
いる。その底をくぐつて進んで行く鋏はさみの律動につれてムクムクと
動いていた。鋏はさみをあげて翻かえすと切られた葉のかたまりはバラバラ
に碎けて横に飛び散つた。刈つたあとには茶褐ちやかっしよく色にやけた朽
ち葉と根との網の上に、まっ白にもえた茎が、針を植えたように
現われた。そして強い土の香がふんと鼻にしみるように立ちのぼ
つた。

無数の葉の一つ一つがきわめて迅速に相次いで切断されるため
に生ずる特殊な音はいろいろの事を思い出させた。理髪師はさみの鋏はさみが
濃密な髪の一束一束を切つて行く音にいつも一種の快感を味わつ
ていた私は、今自分で理髪師の立場からまた少しちがった感覚を

味わっているような気がした。それから子供の時分に見世物で見た象が、藁わらの一束を鼻で巻いて自分の前足のひざへたたきつけた後に、手ぎわよく束の端を口に入れて藁のはかまをかみ切った、あの痛快な音を思い出したりした。しかしなぜこの種類の音が愉快であるかという理由はどう考えてもわからなかった。音の性質から考えればこれは雑音の不規則な集合で、音楽的の価値などは無論無いものである。しかしあるいはこれは聴感に対する音楽に对立させうべき触感あるいは筋肉感に関する楽音のようなものにはあるまいか。音自身よりはむしろ音から連想する触感に一種の快を経験するのではあるまいか。それともまたもつと純粹に心理的な理由によるものだろうか。あるいはひよつとしたらわれわれ

の祖先の類るいじんえん人猿時代のある感覚の記憶でないとも言われな
思つたりした。

鋏の進んで行く先から無数の小さなばつたやおろぎが飛び出
した。平和——であるかどうか、それはわからぬが、ともかくも
人間の目から見では単調らしい虫の世界へ、思いがけもない恐ろ
しい暴力の悪魔が侵入して、非常な目にも止まらぬ速度で、空を
おおう森をなぎ立てるのである。はげしい恐慌に襲われた彼らは
自分の身長は何倍、あるいは何十倍の高さを飛び上がってすぐ前
面の茂みに隠れる。そうして再びはさみ鋏がそこに迫つて来るまではそ
こで落ち付いているらしい。彼らの恐慌は単に反射的の動作に過
ぎないか、あるいは非常に短い記憶しか持っていないのだろうか。

……魚の視感を研究した人の話によると海中で威嚇された魚はわずかに数尺逃げのびると、もうすっかり安心して悠々ゆうゆうと泳いでいるという事である。……今度の大战で荒らされた地方の森に巣をくつっていた鴉からすは、砲撃がやんで数日たたないうちにもう帰つて来て、枝も何も弾丸の雨に吹き飛ばされて坊主になった木の空くうど洞うで、平然と子を育てていたと伝えられている。もつともそう言えば戦乱地の住民自身も同様であつたかもしれない。またある島の火山の爆裂火口の中へ村落を作つていたのがある日突然の爆発に空中へ吹き飛ばされ猫ねこの子一つ残らなかつた事があつた。そうして数年の後にはその同じ火口の中へいつのまにかまた人間の集落が形造られていた。こんな事を考えてみると虫の短い記憶――

―虫にとつては長いかもしれない記憶を笑う事はできなかつた。

無数に群がっている虫の中には私の鋏はさみのために負傷したり死んだりするのもずいぶんありそうに思われて、多少むごたらしい気がしないでもなかつた。しかしどうする事もできないのでかまわず刈つて行つた。これらの虫は害虫だか益虫だか私にはわからなかつた。

子供の時分に私の隣家に信心深い老人がいた。彼は手足に蚊がとまって吸おうとするのを見つけると、静かにそれを追いのけるという事が金棒引きの口から伝えられていた。そしてそれが一つの笑い話の種になっていた。私も人並みに笑つてはいたが、その老人の不思議な行為から一つのなぞのようなものを授けられた。

そうして今日になつてもそのなぞは解く事ができないでそのままになつてゐる。のみならずこのなぞは長い間にいろいろの枝葉を生じてますます大きくなるばかりである。

たとえば人間が始まつて以来今日までかつて断えた事のないあらゆる鬪争の歴史に関するいろいろの学者の解説は、一つも私のふに落ちないように思われた。……私には牛肉を食つていながらヴイヴイセクション生体解剖に反対している人たちの心持ちがわからなかつた。

……人間の平等を論じる人たちがその平等をさる猿やこうもり蝙蝠以下にしひろめない理由がはつきりわからなかつた。……普通選挙を主張している友人に、なぜ家畜にも同じ権利を認めないかと聞いて怒りを買つた事もあつた。

今鋏はさみのさきから飛び出す 昆こんちゆう虫の群れをながめていた瞬間に、突然ある一つの考えが脳裏にひらめいた。それは別段に珍しい考えでもなかったが、その時にはそれが唯一の真理であるように思われた。——もう昆虫の生命などは方則の前の「物質」に過ぎなくなつた。私と私の鋏はその方則であり征服者であり同時に神様であつた。私はわれわれ人間の頭上に恐ろしい大きな鋏を振り回している神様の残忍に痛快な心持ちを想像しながら勢いよく鋏の取つ手を動かして行つた。

病気にさわる事を恐れて初めの日は三尺平方ぐらいにしてやめた。昼過ぎに行つて見ると、刈られた葉はすっかりかわき上がった。

て、青白い干し草になって散らばっていた。日向にさらされたままの鋏の刃はさわって見ると暑いほどにほてっていた。

学校から帰って来た子供らは、少なからざる好奇心をもって刈られた部分を点検したあとで、我れ勝ちに争って鋏を手にした。しばらくして見に行つて見ると、芝生の上にはねずみがかじつたように、三角形や、片かなや、ローマ字などが表われていた。九歳になる女の子は裁縫用の鋏で丁寧に一尺四方ぐらいの部分を刈りひらいて、人差し指の根もとに大きなかわいい肉刺まめをこしらえていた。

いろいろの時刻にいろいろの人が思い思いの場所を刈っていた。人々の個性はこんな些細ささいな事にも強く刻みつけられていた。大ま

かに不ぞろいに刈り散らして虎斑とらふをこしらえる者もあれば、一方から丁寧に秩序正しく、蚕が桑の葉を食って行くように着々進行して行くものもあつた。ある者は根もとまでつめて刈り込まないと承知しないし、またある者はある長さの緑を残すように骨を折っているらしく見えた。

書齋で聞いていると時々鋏はさみの音が聞こえたが、その音のぐあい
でだれがやっているかはたいていわかつた。

午前に私が刈り初めようとするときよく来客があつた。そういう事が三四回もつづいた。来客を呼ぶおまじないだと言つて笑うものもあつた。これは無論直接の因果関係ではなかつたが、しかし全くの偶然でもなかつた。二つの事からを制約する共通な条件は

あつた。ただその条件が必至のものでないだけの事であつた。

毎日少しずつ鋏を使いながら少しずついろいろの事を考えた。

いろいろの考えはどこから出て来るかわからなかつた。前の考えとあとの考えとの関係もわからなかつた。昔ミダス王の理髪師がささやいた秘密を蘆あしの葉が再びささやいたように、今この芝の葉の一つ一つが、昔だれかに聞いた事を今私にささやいているのかもしれない。

たとえば私は自分で芝を刈る事によつて、植木屋の賃銀を奪つているのではないかという問題に出会つた。そしていろいろもて扱つていけるうちに、これがもうかなり古いありふれた問題である事に気がついた。それかと言つてこれに対する明快な解決はや

はり得られなかった。

延び過ぎた芝の根もとが腐れかかっているのを見た時に、私はふと単純な言葉の上の連想から、あまりに栄え茂りすぎた物質的文化のために人間生活の根本が腐れかかるのではないかと思つてみた。そしてそれを救うにはなんとかして少しこの文明を刈り込む必要がありはしないかと考えた。しかし芝と文化とはなんの關係もない。芝を刈るのがいいといつても文明を刈り取るがいいという証拠にも何もならない事は明らかであつた。あまりに皮相的な軽率な類推の危険な事を今さらのように思つてみたりした。實際そんな単純な考えが熱狂的な少数の人の口から群集の間に燎りよう原げんの火のようにひろがって、「芝」を根もとまで焼き払おうと

した例が西洋の歴史などにないでもなかった。文明の葉は刈るわけにも焼くわけにも行かない。

始めのうちはおもしろがっていた子供らもじきに飽きてしまつてだれも鋏はさみを手にするものはなくなった。ただ長女と私とが時々少しずつ刈つて行つた。そのうちには雨が降つたりして休む日もあるので、いちばん始めに刈つた所はもうかなりに新しい芽を延ばして来た。

最後に刈り残された庭の片すみのカンナの葉陰に、一きわ濃く茂つた部分を刈つていた長女は、そこで妙なものを発見したと言つて持つて来た。子供の指先ぐらいの大きさをした何かの卵であ

った。つまんで見ると殻からは柔らかくてぶよぶよしていた。一つ鏟にかかつてつぶれたのをあけて見たら中には蜥蜴とかげのかえりかかったのがはいつていたそうである。「人間のおなかの中にいるときとよく似ているわ」とそばから小さな女の子が付け加えた。私は非常に驚いてこの子供の知識の出所を聞きただしてみると、それがお茶ちやの水みずで開かれたある展覧会で見たアルコールづけの標本から得たものである事がわかった。

子供らはこの卵の三つか四つを日当たりのいい縁側の下の土に埋めておいた。数日たった後に掘ってみたらもう何もなかったさうである。ここにも大きな奇蹟きせきはあった。

十日ほどにわたった芝刈りがやっと終わった。結果はあまり体

裁のいいほうではなかった。刈り手の個性と刈り時の遅速とが芝生の上に不規則なまだらを描いていた。休まず働いている自然の手がその痕跡こんせきをぬぐい消すにはまだ幾日か待たなければならなかった。

保養の目的が達せられたかどうかはわからなかった。たいしてからだにさわりもしなかつた代わりに別段のいい効果があつたとも思われぬ。そのような効果が、秤はかりや升ますではかれるように判然とわかるものだったら、医師はさぞ喜びもしまた困る事だろうと思つた。——ただ蜥蜴とかげの卵というものを始めて実見したのがおそろくこの数日の仕事の一番の獲物であつたろうと思つている。

(大正十年一月、中央公論)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芝刈り

寺田寅彦

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>